

万葉集巻5における語彙について

－「助詞・名詞・副詞」を中心に－

安 熙 貞*

(e-mail: hjahn@uu.ac.kr)

目 次

1. はじめに	4. 名詞
2. 分析の基準と研究方法	5. 副詞
3. 助詞	6. おわりに

1. はじめに

蔵中進(1964・1965)は「万葉集で初出の語の使用者が憶良である」場合、「初語」と、「ある語の最終の使用者が憶良である」場合、「終語」と命名した。そして高木市之助の術語である「孤語」をも用いて分析した。その結果、蔵中(1964)では、

憶良作品中における約音使用の頻度は当代の他の作家に比し、かなり高いものであって、憶良の言語感覚をしのばせるものがあるように思われる。

と結論づけ、さらにそれを発展させて、蔵中(1965)では憶良の用語の特徴として①孤語がきわめて多数あること、②終語も多数あること、③初語もかなり多数あること、そして④歌語としてはかなり特異である特異語が用いられていることをあげている。また、憶良の初語の性格については「訓読語に出るもの、方言に出るもの、古語の復活使用、当代の俗語のごときもの等々で、従来歌語としてはかえりみられることのなかったものである。」と言っている。

* 威徳大学校 助教授 日本語学

る。憶良と家持との関係については「憶良の“初語”の大部分は家持によってそっくり借用され、逆に借用されたことによって憶良の“孤語”であったものの多くは“初語”となったのである。家持の側からいえば、憶良の用いている珍しい用語、一風変わった用語はすべて無批判に真似てしまうという顕著な傾向が目につくのである。」と明らかにしている。以上のような蔵中の研究はたいへん貴重なものであり、憶良についての研究をさらに進化させたことは言うまでもないのである。

ところが、巻5と憶良に関する先行研究は、蔵中進以外は、たいてい表記と筆録者、用字または用語、そして特に「何せむに」についての研究や韓国漢字音と万葉集の音仮名との関係などであって、今のところ語彙全般についての本格的な研究は管見の限りではないようである。

本稿では、巻5だけに絞って憶良と家持やその他の作者における語彙分析とその特徴を考察することを研究の目的とする。但し、本稿では紙面の都合上「助詞・名詞・副詞」を中心に分析することにする。この研究結果を持って今後憶良とその他の作者とにおける語彙と表記字との関係の特徴を検討するつもりである。

2. 分析の基準と研究方法

巻5には、歌が計114首あるが、そのうち憶良48首、旅人15首、大宰府官人6首、吉田宜4首、作者未詳3首、そして京人の女2首、旅人周囲の人2首、麻田陽春2首があり、その他32人が各1首ずつ残している。1)従って、巻5で各作者の占めている割合は、憶良42.1%、旅人13.2%で、他の作者は44.7%である。これは歌だけの割合であって、句数で再分析すると、計974句の中、憶良579句、旅人78句、他の作者は317句である。よって、その割合は、それぞれ憶良59.4%、旅人8.0%、他の作者32.6%となるが、これは品詞別の特徴を検討するにあたってより有効な数値であると考えられるので、この割合を基準にして分析することにする。

本稿で使用している底本は鶴久・森山隆(1995)の『万葉集』である。訓読もこの『万葉集』によっているが、語彙の品詞別区分は『時代別国語大辞典-上代編-』(1994)に

1)1首だけの作者を歌番号順にあげると次のようである。

藤原房前・大式紀卿・少式小野大夫・少式粟田大夫・豊後守大伴大夫・筑後守葛井大夫・笠沙弥・大監伴氏百代・小監阿氏奥嶋・小監土氏百村・大典史氏大原・小典山氏若麻呂・大判事丹氏麻呂・薬師張氏福子・筑前介佐氏子首・壹岐守板氏安麻呂・神司荒氏稲布・大令史野氏宿奈麻呂・小令史田氏肥人・薬師高氏義通・陰陽師儀氏法麻呂・竿師志氏大道・大隅目榎氏鉢麻呂・筑前目田氏真上・壹岐目村氏彼方・対馬目高氏老・薩摩目高氏海人・土師氏御道・小野氏国堅・筑前拯門氏石足・小野氏淡理・三嶋王

したがっている。

そして、巻5には作者と表記者との一致または不一致のことについては問題になっているものの、筆者は稲岡耕二(1986：217-452)の研究結果に全面的に同意する立場である。但し、次のような

- 904 世人之 貴慕 七種之 宝毛我波 何為 和我中能
905 和可家礼婆 道行之良士 末比波世武 之多敝乃使 於比弓登保良世
906 布施於吉弓 吾波許比能武 阿射無加受 多太余率去弓 阿麻治思良之米

904～906番歌は、左注に

右一首作者未詳但以裁歌之体似於山上之操載此次焉

と記載されているので、この歌を作者未詳とみるか、それとも憶良の作歌とみるかという問題がある。これについて稲岡耕二(1986：414)は、次のように言っている。

以上縷述したように九〇四以下三首は、他の憶良歌とは異なる性格を表記の上でも示している。左注の筆者の推定のように、憶良の作歌であるとしても、表記自体が憶良の筆になるかどうかは疑わしい。第一にモノの甲乙の書き分けがほとんどなされていないし、第二に「取る」の表記に、古語意識も認められない。第三に、他の憶良歌、ひいては巻五でもほかにはみられぬ特殊な仮名字母が、九〇四以下に集中している事実がある。従って、他の憶良歌と同一の筆者の手になる文字面とは考えられない。それでは誰が、この歌の表記をかくあらしめたのか。私はそれを家持と考えている。理由は次に記すことにある。…

つまり、作者のことは特定していないようであるが、その表記については編者の家持と考えている。表記者については筆者も同意しているが、作者が誰なのかは未だ確定できないのでこの三つの歌は作者未詳と取り扱うことにする。

また、796番歌は、

伴之伎与之 加久乃未可良余 之多比己之 伊毛我已許呂乃 須別毛須別那左

作者は憶良であるが、その表記には異質性が確認される。このことについて稲岡耕二(1986：281)は、

ところで、巻五前半部の憶良歌に限っていうならば、ただ一首七九六歌のみにモノの混用

がみられる。これはどう解すべきであろうか。日本挽歌の長反歌を通じ、また、神亀五年の憶良作(七九四～八〇五)を通じて整然とした書き分けが認められるゆえに、……七九六歌におけるその混乱は、原文から存したものではなく、後に、何らかの事情でこの一首には後人の文字遣いが混入したものと考えるのが至当である。既述の、「伴」「之」「己」「別」「左」という憶良歌には珍しい仮名をみることも、また、七九六のみ——日本挽歌の反歌中——同字反復が避けられているところがあるのも、原作の面影がそこなわれた結果であると思われる。その区別や他の日本挽歌の反歌にみられる徹底した同字法的傾向を考慮しつつ原文の形を想定すれば、七九六は本来、

波斯伎与斯可久乃尾可良尔斯多比許斯伊毛何許々呂乃須弊母須弊那佐
とあったものと思う。

と言っている。全くその通りであると考えられるので、この歌は表記に編者の介入はあるものの、作者が憶良であることは変わりがない。そこで本稿ではこの歌は憶良の歌として取り扱うことにする。

一方、旅人は15首もあり、また憶良との関係を考え合わせると、旅人だけを一つの比較対象としてあげるのも有意義であると考えられ、参考のため表の中に旅人の語彙使用も提示している。但し、巻5の語彙特徴を分析するにあたって旅人を独立して三つに分けて検討し、また旅人を独立せず他の作者に入れて分析を併行する。

3. 助詞

助詞は、表1のように延べ語数1015語であり、巻5の中で32.7%を占めている。異なり語数は45語である。²⁾その内、憶良(以下、〈オ〉)は580語・40語、旅人(以下、〈タ〉)は88語・20語、他の作者(以下、〈他〉)347語・27語である。延べ語数の例数の割合は、〈オ〉57.1%、〈タ〉8.7%、〈他〉34.2%であり、句数の割合とほぼ同じである。異なり語数の割合は「〈オ〉88.9%・〈タ〉44.4%・〈他〉60.0%」である。ということは、「〈オ〉：〈タ〉：〈他〉＝9：4.5：6 → 6：3：4」の比率となり、句数における比率と比較すると、〈タ〉は約2倍強、〈他〉は約1倍弱多く、また〈タ〉と〈他〉を合わせると、「〈オ〉：〈タ・他〉＝88.9%：68.9%」となり後者が10%多いということになる。

2)巻5の延べ語数は3106語である。

表1 助詞

	語彙	<オ>	<タ>	<他>	計		語彙	<オ>	<タ>	<他>	計
1	カ	15		2	17	23	ナヘ			1	1
2	ガ	27	6	21	54	24	ナム	5		1	6
3	ガネ	1			1	25	ニ	69	18	48	135
4	カム	1			1	26	ネ	3			3
5	カモ乙	3	2	7	12	27	ノ	116	21	98	235
5	カモ甲			4	4	28	ノミ	10			10
6	カラニ	1			1	29	ハ	49	7	25	81
7	コソ	1		3	4	30	バ	31	1	14	46
8	シ	10	2	10	22	31	バカリ	2			2
9	シカ		1		1	32	ハモ	4			4
10	シモ	1			1	33	ヘ	2			2
11	スラ	1			1	34	マデ	2		2	4
12	ソ		1		1	35	モ甲	3		9	12
13	ゾ	3		2	5	35	モ乙	33	6	13	52
14	ダニ	2			2	36	モガ	4	2		6
15	ツ	1		2	3	37	モノヲ	1		2	3
16	ツツ	10		6	16	38	ヤ	16	1	7	24
17	テ	51	3	19	73	39	ユ	3			3
18	ト	33	4	18	55	40	ヨ(より)		1		1
19	ド	8	2	2	12	41	ヨ	2		1	3
20	トモ甲			2	2	42	ヨリ	5	2		7
20	トモ乙	2	3	2	7	43	ロ	1			1
21	ドモ乙	5		2	7	44	エ			1	1
21	ドモ甲	1		2	3	45	ヲ	40	4	19	63
22	ナ	2	1	2	5		小計	580	88	347	1015

語彙の特徴として考えられるのは、第一に、<オ>と<タ・他>に共通している語彙は27語である。そして、45語の中<オ>に用いられていない助詞は、「シカ・ソ・ナヘ・ヨ・エ」の5語であり、<タ>と<他>に用いられていない助詞は、「ガネ・カム・カラニ・シモ・スラ・ダニ・ネ・ノミ・バカリ・ハモ・ヘ・ユ・ロ」の13語である。もう一つの特徴と言えば、<オ>の「ユ」に対して<他>にはその例がないが、<タ>に「ヨ」になっていることである。

第二に、例の多い順の中、上位10位の語は、<オ>は「ノ・ニ・テ・ハ・ヲ・モ乙・ト・バ・ガ・ヤ」の順になっているが、<タ・他>は「ノ・ニ・ハ・ガ・ヲ・ト・テ・モ乙・バ・シ」の順になっている。<オ>には上位10位「ヤ」(16例)に次ぐ11位の「カ」の使用が目立つ。<オ>は「カ」を15例も使っているのに対して、<タ・他>は正確に言えば<タ>にその例がなく、<他>に2例しかないということである。その例を示せ

ば次のようである。

794 伊可余世与等可/795 伊可余可阿我世武<日本挽歌>・800 奈利提志比等
迦/800 斯可余波阿羅慈迦<令反或情歌>・804 伊都乃麻可/804 伊豆久由可
<哀世間難住歌>・861 阿由可都流良武<遊於松浦河歌群>・870 奈余可佐夜礼
留<憶良の鄙歌>・874 可弊礼等加<佐用比売の歌群>・877 和周良志奈牟迦
<書殿餞酒日倭歌>・887 伊豆知武伎提可/888 伊可余可由迦牟<敬和為熊凝述
其志歌六首>・892 伊可余之都々可/892 人皆可/892 須部奈伎物能可<貧窮問
答歌>

<オ>の15例の中、12例は<日本挽歌><令反或情歌><哀世間難住歌><憶良の鄙
歌><敬和為熊凝述其志歌六首><貧窮問答歌>に属して、その内容が「死・迷う
心・人生無常・貧窮」などである。つまり、<オ>の歌に「カ」の多く用いられているこ
の結果は歌の性格と密接に関係していると考えられる。

第三に、甲類と乙類との混乱についてである。

「カモ乙」は、<オ>では3例(797 久夜斯可母・886 伊都斯可母・903 意母
保由留加母)すべてが乙類になっており、<タ>も2例(810 日能等伎余可母・822
那何列久流加母)ともに乙類なので混乱はないが、<他>では7例(828 烏梅能波奈
加母・835 阿比美都流可母・844 由岐可母不流登・865 阿麻越等売可忘・866
於忘方由流可母・872 伊賓都夏等可母・885 須疑加弓奴可母)は乙類であるもの
の、4例(816 阿利己世奴加毛・844 烏梅能波奈可毛・846 烏梅能波那可毛・
904 何時可毛)は甲類の「毛」を使っており混乱していることが分かる。

「トモ乙」は<オ>に2例(889 斯奈婆斯農等母・889 能知波志奴等母)と
<タ>に3例(811 樹余波安里等母・847 久須利波武等母・849 由吉波気奴等
勿)あり、すべて乙類で混乱していないが、<他>には乙類2例(821 知利奴得母与
斯・830 得之波岐布得母)、甲類2例(812 紀余茂安理等毛・860 与等武等
毛)というふうに混乱が見える。

「ドモ乙」は<タ>に例はない。<オ>には乙類5例³⁾(805 意母閉騰母・892
妻子等波・892 妻子等母波・893 於母倍杼母・894 満弓播阿礼等母)と甲類1
例(892 伎曾倍騰毛)がある。<他>には乙類(828 阿蘇倍等母・836 阿蘇倍
等母)と甲類(904 立礼杼毛・904 居礼杼毛)の使用が2例ずつである。これはす
でに「モ」の甲類と乙類との区別は失われていたためであると推定できる。

「モ乙」は、乙類になっているものが52例であり、甲類になっているのが12例である。

3)5例のうち1例は音仮名ではなく正訓字である。

<タ>の場合は、「カモ乙」と「ト乙モ乙」と同じく「モ乙」の場合もすべて乙類を使っており、1例も混乱がないのが特徴である。<タ>の「モ乙」の例は

806 多都能馬母・806 伊麻勿愛弓之可・807 安布余志勿奈子・847 麻多遠
知米也母・850 弥牟必登母我聞・851 美牟必登聞我母

のようである。<他>には乙類が13例、甲類が9例で使われ混乱している。<オ>には33例が乙類になっているが、3例(796 須別毛須別那左・892 綿毛奈伎・892 事毛和須礼提)が甲類になっている。<オ>が「モ」の甲類と乙類とを混乱しているのは非常に珍しいことである。まず「モ甲」3例のうち796番歌をもう一度示せば

伴之伎与之 加久乃未可良余 之多比己之 伊毛我已許呂乃 須別毛須別那左

のようである。この歌は日本挽歌(794~799)6首に含まれており<オ>の歌である。<オ>の歌でありながらその表記に関しては他の5首とは異なり、また長歌の794の用字とはもちろんのこと、他の<オ>の作品中にはほとんど見られない「伴・之・伎・己・別・左」などの仮名を使用している。従って稲岡耕二の説明のように筆録者は<オ>ではなく編者の用字の混入、即ち家持であると考えられる。また796番歌以外の<オ>の作品でありながら乙類ではなく甲類になっている「モ」2例と「ドモ」1例も稲岡耕二の説明があるのでそれに譲ることにする。4)但し、その説明に筆者の意見を付言すれば、<オ>の生没年代が「斉明天皇6年(660年?)~天平5年(733年?)」であり、<タ>は「天智天皇4年(665年)~天平3年(731年)」であるので、ほぼ同時代の人々であるにもかかわらず、<オ>には47例の中3例(6.4%)に「モ」の甲類と乙類の混乱があるということは、<タ>にはそういう混乱がないという根拠によって<オ>にも元々その混乱がなかったことを傍証することができると考えられる。

4) 「母延農」は、モの甲乙の区別からいえば、モ(甲)であって、本来「毛延農」とあるべきところ。巻五の憶良歌では貧窮問答歌を除くと(この点については後述)、モの二類の別が厳密に書き分けられておりただ一つこの「母延農」が古事記の例と異なる。古事記においては「燃ゆ」は「毛由流」(歌謡二四・七六)であって、モ(甲)であることが知られる。貧窮問答歌以外では唯一の異例であることともに、巻五が古写本に恵まれない巻であることも注意される必要がある。(p.400)

「母延農」の「母」もあるいは元や類の本文があれば、毛となっているのをみうるのではないかと想像するのは、先にもいったように、巻五の憶良歌の「母」「毛」の書き分けが実に見事だからである。貧窮問答歌には特別な事情もあろうが、それを除けば、憶良作歌のモの表記は「母」と「毛」の二字で古音を写して乱れをみせない。……モの甲乙を書き分けるのも、同様な意識を背景にすることと解されるが、同年の三月に作られた好去好来歌にも誤りがないのに(もっともモ甲の例がないが)、この老身重病歌にのみ異例をみるのは解せない。そこで元や類があつたらと想像もされる。老身重病歌には「許良」の許と、「母延農」の母と、上代仮名遣いの誤りが二箇所あるが、結局それらを伝写の誤りとする考えに傾くのである。(p.401)

4. 名詞

名詞は延べ語数766語であり、巻5の中で24.7%を占めている。5)異なり語数の場合は316語であるので、助詞が延べ語数に対しての異なり語数の割合が4.4%であるのに対して、41.3%になる。周知のようにその違いは品詞の差によるのであるが、重複した語彙があまりないことを言っている。〈オ〉は417語・227語、〈タ〉は78語・49語、〈他〉は271語・135語である。延べ語数の割合は、それぞれ〈オ〉54.4%、〈タ〉10.2%、〈他〉35.4%である。この割合は句数においての「〈オ〉59.4%・〈タ〉8.0%・〈他〉32.6%」に比して、〈オ〉の方は5.0%減で〈タ〉2.2%増と〈他〉2.8%増となっており少しの差を見せている。異なり語数は、〈オ〉71.8% (+12.4%)・〈タ〉15.5% (+7.5%)・〈他〉42.7% (+10.1%) であり、〈タ〉と〈他〉を合わせると154語であるので48.7% (+8.1%) となる。ということは、〈オ〉の方が名詞をもっと多様に使用していることを意味する。そして1回しか使われていない語と、2回以上用いられている語とを比較すれば、〈オ〉は「155語：72語」で68.3%：31.7%、〈タ〉は「32語：17語」で65.3%：34.7%、〈他〉は「98語：37語」で72.6%：27.4%である。

語彙の特徴として考えられるのは、第一に、〈オ〉と〈タ・他〉に共通している語彙は、

794 於母波奴阿比阿比阿比・832 家布能阿比太波阿比・794 迦多知波阿良牟乎阿比・904 可多知都久保里阿比・851 左加里余散家留阿比・894 愛能盛余阿比・803 麻佐礼留多可良阿比・904 宝毛我波阿比・868 夜麻能名乃尾夜阿比・871 於返流夜麻能奈阿比・818 烏梅能波奈阿比・819 烏梅能波奈余母阿比・808 多都乃麻乎阿比・877 美麻知可豆加婆阿比・823 許能紀能夜麻余阿比・868 夜麻能名乃尾夜阿比・858 和可阿比都流阿比・863 和可阿比都流阿比

のように「アヒダ・カタチ・サカリ・タカラ・ナ (名) ・ハナ・マ (馬) ・ヤマ・ワカユ」など61語である。そこで異なり語数316語に対する割合は19.3%になっている。そして、〈オ〉には用いられているものの、〈タ〉と〈他〉には用いられていない名詞は「アカゴマ・カカフ・サカヒ・タクナハ・トキハ・ナ (魚) ・ハシ・マ (間) ・ヤマヒ・ワタ」など165語で、52.2%を占めている。逆に〈タ〉と〈他〉には用いられていて、〈オ〉には用いられていない名詞としては、「アカホシ・カザシ・サカツキ・タケ・ナガコヒ・ハヤシ・マ

5)名詞の表は長いので6章の後に掲げることとする。

ソカガミ・ヤナギ・ワガへ」など88語で、27.8%を占めている。これは句数においての「<オ> : <タ・他>」が約「6 : 4」の比率であることを考慮すれば、「<オ>52.2% : <タ・他>27.8% = 6.5 : 3.5」になるので、<オ>の方がより多様な語彙を歌の中に入れていたことが伺える。

第二に、例の多い語をあげると、<オ>は、「ヨ（世）・ヒト・ハハ・イへ/スベ/ナカ・クニ/ココロ・アメ（天）/チチ/モノ」の順になっているが、<タ・他>は、「ウメ・ハナ・ハル・ヒト・キミ・ウグヒス/ソノ/ユキ・イマ/コト/サカリ」の順になっている。6)この例の多い語彙の中、両方共通している語は「ヒト」一語に過ぎない。これは両方の歌の性格が確然と相違していることを意味するのである。その例と歌名とを示せば次のようである。

800 由久智布比等波・800 奈利提志比等迦[令反或情歌]/804 比等余伊等波延・804 比等余还久麻延[哀世間難住歌]/813 世人余[鎮懐石歌]/862 比等未奈能・863 比等能等母斯佐[遊於松浦河歌群]/892 人者安良自等・892 貧人乃・892 人皆可・892 比等々波安流乎[貧窮問答歌]/894 人母許等期等・894 人佐播余[好去好来歌]

<以上、憶良>

810 比等能比射乃倍[旅人歌と房前の返歌]/850 弥牟必登母我聞・851 美牟必登聞我母[後追和梅歌四首]/853 比得波伊倍騰[遊於松浦河歌群]

<以上、旅人>

808 許牟比等乃多仁人の歌<京人の女>/828 比等期等余[梅花歌]<大判事丹氏麻呂>・839 比得能美流麻提[梅花歌]<筑前目田氏真上>・904 世人之・904 比等々奈理伊弓天[恋男子名古日歌]<作者未詳>

もう一つの特徴と言え、「ウメ」と「ハナ（花）」の頻度である。<オ>にはそれぞれ1例と3例しかないが、<タ>には5例と6例、そして<他>には31例と27例もあるのである。これも歌の性格と密接に関係があるが、もしこの2語を1回に使われている例数として分析すれば、<オ>は2回減、<タ>は9回減、<他>は56回減になるので、名詞の延べ語数は766語から699語になる。そこで、その例数の割合は「<オ>54.4%・<タ>10.2%・<他>35.4%」から「<オ>59.4%・<タ>9.9%・<他>30.7%」になり、<オ>と<他>の割合は句数の割合にもっと接近していることが分かる。

第三に、甲類と乙類との混乱に関してである。混乱している語彙には「イモ_甲・コ_甲ラ・タモ_乙ト・ヤド_甲」などがあり、助詞においての「モ」の甲乙の混乱以外に「コ・ド」のよう

6) 「/」は同じ例数を示す。

な混乱があるのが特徴である。まず「モ」の場合は、もともと「イモ_甲 (794 伊毛乃美許等能・796 伊毛我已許呂乃・798 伊毛何美斯・863 伊毛良遠美良牟<以上、憶良>・855 多々勢流伊毛何・857 伊毛我多毛等乎<以上、大宰府官人>)」である例が6回あり、異例が「844 伊母我陸迹<小野氏国堅>」のように「イモ_乙」1例がある。そして、「タモ_乙」は乙類 (804 多母等糸麻可志<憶良>) と甲類 (857 伊毛我多毛等乎<大宰府官人>) とが1例ずつある。この2語の特徴と言えば、<オ>には異例がなく、同じ857番歌に「イモ_甲」と「タモ_甲」と「モ」の混乱が現れることである。

「ヤド」は、「ヤド_甲 (826 和我夜度能<大典史氏大原>・842 和我夜度能<薩摩目高氏海人>・851 和我夜度糸<旅人>)」である例が3回あり、異例が「818 麻豆佐久耶登能<憶良>」のように「ヤド_乙」1例あるが、作者が憶良である。これは『万葉集(日本古典文学大系)』(1959:74)の頭注の説明その通りであると思う。7)

「コ_甲ラ」は、「子」と接尾語「ら」とによる複合語であると考えられる。「コ」の場合、

794 泣子那須・803 古糸斯迦米夜母・868 佐欲比売能故何・894 家子等<憶良>/853 有麻必等能古等<旅人>/845 意母布故我多米<筑前拯門氏石足>/904 吾子古日者・904 安我古登婆之都<作者未詳>

のように8例が現れるが、そのうち訓読字「子」3例のほか、「古 (3例) 」と「故 (2例) 」とによって甲類であることが分かる。しかし、「コ_甲ラ」は、次のように

856 麻都良奈流 多麻之麻河波糸 阿由都流等 多々世流古良何 伊弊遅斯良受毛<大宰府官人>

899 周弊母奈久 阿礼婆 出波之利 伊奈々等思騰 許良糸佐夜利奴<憶良>

「コ_甲ラ」と「コ_乙ラ」と1例ずつある。しかも、「コ_乙ラ」の場合、その作者が<タ>や<他>ではなく、<オ>の例であることが目を引くのである。これには何かの事情があるはずである。万葉集全巻にわたって「コ」の例は92例あり、その中の表記は、訓読字の「子 (36例) 」・「兒 (46例) 」、音仮名としては「古 (6例) 」・「故 (4例) 」がある。そして、「コ_甲ラ」は、51例あり、そのうち訓読字の「子等 (20例) 」・「兒等 (15例) 」、訓読字と音仮名とになっている「兒良 (10例) 」、音仮名としては「古良 (6例) 」がある。「子」の「古・故」の表記によって、また「古良」の表記によっても「コ」は甲類なのは確かである。但し、今問題になっている899番歌の「許良」に乙類の

7) 宿：ヤドののに「登」を用いるのは、清濁の点でも、特殊仮名遣の点でも違例。おそらくは後世の誤写か。巻五は古写本が乏しい。

「許」の表記が用いられており、万葉集では「コ_乙ラ」の唯一の例である。

この899番歌の「許良」については「これら」と解釈する説と「こども」と見る説とがある。「コラ」を「これら」、つまり「こいつら」の意味として解釈するのは次のようである。

此らに障りぬ：コラのコの原文「許」は乙類のコに当る。「子等」と解するには、「子」のコが甲類であるべき点に疑問があり、コの甲乙の発音の別は平安初期まで守られていた。コレ・ココ・コノなどの「此」は乙類で、作者は傍らの子等をさして、こいつら、と言ったとする説による。（口語訳：この子らに邪魔されて思いとどまった）『万葉集(新編日本古典文学全集)』（1995：90-91）

「こら」は「子ら」と理解したいところ。しかし、原文「許」は乙類の文字。「子」は「古」「固」など甲類の文字で表すのが上代の決まり。指示語「此」は乙類で書く。傍らの子を「此」と呼んだものと見ておく。（口語訳：騒ぎ回るこのめんこいやつらに妨げられてしまう。）『万葉集釈注』（1996：245-251）

そして、『万葉集(日本古典文学大系)』（1959：117）と『万葉集注釈』（1990：298-299）は、

見ら：子供たち。原文、許良。許（コ）はコ乙類ゆえ、「子」と解するは例外（子はコ甲類が通例）→補注。（口語訳：子供たちに、ひっかかってそれが出来ない。）

口訳：何とも仕様のない程苦しいので、家から駆け出してどこかへ行つてしまひたいと思ふけれど、子どもに妨げられてそれも出来ない。

訓釈：「子」の仮名（甲）に「許」（乙）を用いたのは違例である。

のように例外あるいは異例と見て「こども」と解釈し、『万葉集私注』（1956：233）では

この世はなす術もなく苦しくあるから、家を出て走つて何方へも行かうと思ふけれど、子供等に遮られてしまふ。

のように「こども」と訳しているが、その根拠については一言も触れていない。

筆者はこの「コ_乙ラ」は明白に異例であると判断している。『大系本』の補注には

だいたい、巻五は良い古写本にとぼしい巻である。次点本は紀州本があるほか、類聚古集・古葉略類聚鈔がところどころあるだけである。それゆえ、これらの本文の違例も、もつ

と多数の次点本が存在していたらば、或いは改訂されるものではあるまいかと推測される。

のように巻5に古写本があまりないことに起因するといっているが、まったくそのとおりであろう。その理由は、一番目に、『時代別国語辞典-上代編-』（1994：285）には、「コ(此)」について

こ[此・是](代名)近称。ノ・ヲ・ユ・ヨ・モ・シなどの助詞を伴って用いられるほか、コヨヒのように複合語を作ることもある。①話し手の居る場所を指示する。ココに同じ。②前出の事項または語を指示する。ノを伴う場合が最も多いが、コノは連体詞的用法のものばかりで、コが明らかにある対象を指示する代名詞的用法をみない。

と説明されているが、万葉集全巻において「コ」は、

8-1476 霍公鳥 從此間鳴渡<小治田広耳>/8-1491 霍公鳥 雨間毛不置 从此間喧渡<家持>/8-1562 从此間鳴渡 鴈鳴乃<巫部麻蘇娘子>/9-1728 従明日波 恋鴨行武 从此間別者<石川年足>
10-1955 霍公鳥 厭時無 菖蒲 纈将為日 从此鳴度礼/10-1959 霍公鳥 指春日而 从此鳴度/10-1977 霍公鳥 小竹野爾所沾而 从此鳴綿類
11-2491 男為鳥 従是此度<柿本人麻呂歌集>/13-3257 直不来 自此巨勢道柄/13-3320 直不往 此従巨勢道柄
15-3783 保登等伎須 和我須武佐刀爾 許欲奈伎和多流<中臣宅守>/18-4035 保等登芸須 伊等布登伎奈之 安夜壳具左 加豆良爾勢武日 許由奈伎和多礼<田辺福麻呂>/18-4054 保等登芸須 許欲奈伎和多礼<家持>

のように13例あり、「此間・此・是」と「許」の表記になっており、「コ」単独ではなくいつも助詞「ヨ・ユ」をともなって、その意味はすべて①の場所「ココ」として用いられているためである。

二番目に、記紀歌謡の場合、日本書紀の歌謡は、次のように

5-15⁸⁾ 許能瀨枳破 和餓瀨枳那羅孺/7-23 于受珥左勢許能固/9-32 虚能弥企破 和餓弥企那羅孺/9-33 許能弥企塢 伽弥鷄武比等破……許能弥企能 阿椰珥于多娜濃芝/14-75 拖挖例柯拳能居登 飢哀磨陞爾麻鳴須/15-84 於尸農瀨能 莒能陁寄紀儺屢 都奴娑之能瀨野

8)数字は『古事記・上代歌謡(日本古典文学全集)』にある「歌番号」を表す。但し、日本書紀は「一」の前の数字は巻番号である。

7例すべて連体詞的用法の「コノ」しか見えない。これに対して古事記の歌謡は、次のように

2 許能登理母 宇知夜米許世泥/39 許能美岐波 和賀美岐那良受/40 許能美岐袁 迦美祁牟比登波……許能美岐能 美岐能 阿夜迹宇多陀怒斯/42 許能迦迹夜 伊豆久能迦迹/101 夜麻登能 許能多氣知爾

連体詞的用法もあるが、

2 許登能 加多理其登母 許遠婆/3 許登能 加多理碁登母 許遠婆 …許登能 迦多理碁登母 許遠婆/4 許登能 加多理碁登母 許遠婆/100 許登能 加多理碁登母 許遠婆/101 許登能 加多理碁登母 許遠婆/102 許登能 加多理碁登母 許遠婆

のように常套句「事の 語言も 是をば (コノ カタリゴトモ コヲバ)」の「このこと」の意としての「コ」がある。そのほかに「これ(この物)」の意味として1例(4 波多多芸母 許母布佐波受)あり、上掲の辞書で「コが明らかに対象を指示する代名詞的用法をみない」としているが、代名詞の用法として次の1例がある。⁹⁾

100 美弊能古賀 佐佐賀世流 美豆多麻宇岐爾 宇岐志阿夫良 淤知那豆佐比美那許袁呂許袁呂爾 許斯母 阿夜爾加志古志

この歌で「コ」は「ウキ(盞)」を指す代名詞である。しかし、以上のように万葉集はもろんのこと、記紀歌謡にも「コ乙」には「ヒト」を指す代名詞的用法はないためである。

三番目に、〈タ〉は「モ」を含めて甲乙の区別のある語に1例も混乱がなく正確に区別を守っているが、同時代の「古語意識」に富んだ〈オ〉も編者の書き入れのある場合以外には例外なく甲乙の区別を守っているためである。

5. 副詞

副詞は、表2のように延べ語数71語、異なり語数38語であり、巻5で2.3%を占めている。その中で〈オ〉は50語・28語、〈タ〉は4語・4語、〈他〉は17語・14語である。

9) 「こども」の「コ_甲ラ」は、古事記歌謡に4例、日本書紀歌謡に6例ある。

従って、延べ語数の割合は、「〈オ〉70.4%・〈タ〉5.6%・〈他〉23.9%」であり、句数の割合「〈オ〉59.4%・〈タ〉8.0%・〈他〉32.6%」は、助詞や名詞における比率と著しい差があることになる。つまり、〈オ〉の方が副詞を11%も多く使っていることが特徴である。異なり語数の場合も、〈オ〉73.7% (+14.5%)・〈タ〉10.5% (+2.5%)・〈他〉36.8% (+4.2%) (〈タ〉と〈他〉とを合わせると42.1% (-0.5%)) になる) であるので〈オ〉の方が語彙の多様性を見せている。

語彙の特徴として考えられるのは、第一に、38語の中、〈オ〉と〈タ・他〉に共通している語彙は、「イカニ・イマダ・カク・トモニ・マスマス・マニマニ」のように6語であり、15.8%を占めるので、名詞の割合19.3%より3.5%減っている。これは両方とも副詞をより多様に使っていることを意味する。そして、〈オ〉に用いられていない副詞は、「アサナサナ・ココダ・シマシク・タダニ・ナ・ハロハロニ・ヤクヤクニ」などの10語であり、〈タ〉と〈他〉に用いられていない副詞は、「アヤニ・カ・サキク・タダ・ナホナホニ・マシテ・ワクラバニ」などの22語である。

表 2 副詞

	語彙	〈オ〉	〈タ〉	〈他〉	計		語彙	〈オ〉	〈タ〉	〈他〉	計
1	アサナサナ			1	1	21	タダ	1			1
2	アヤニ	1			1	22	タダニ			2	2
3	イカニ	4	1	1	6	23	ツネ	3			3
4	イクダ	1			1	24	ツネニ	1			1
5	イトノキテ	2			2	25	テヅカラ	1			1
6	イマダ	3		1	4	26	トノシク	1			1
7	イヨヨ		1		1	27	トモニ	1		1	2
8	ウベ			1	1	28	ナ		1	1	2
9	カ	1			1	29	ナホナホニ	1			1
10	カク	11		3	14	30	ニフフカニ			1	1
11	カニカクニ	2			2	31	ハロハロニ			1	1
12	カムナガラ	2			2	32	マシテ	1			1
13	クレクレ	1			1	33	マスマス	1	1		2
14	ココダ			1	1	34	マヅ	1			1
15	コトコト	1			1	35	マニマニ	2		1	3
16	サキク	1			1	36	モトナ	1			1
17	サハニ	1			1	37	ヤクヤクニ			1	1
18	サラニ	1			1	38	ワクラバニ	1			1
19	シカ	2			2		小計	50	4	17	71
20	シマシク			1	1						

第二に、3回以上の使用頻度を見せる語彙は、〈オ〉には「カク・イカニ・イマダノ・

ツネ」のように4語があり、〈タ・他〉には「カク」一語しかない。10) 「カク」は

796 加久乃未可良尒・797 可久斯良摩世婆・800 加久叙許等和理・804 可久乃未奈良之・804 可久由既婆・804 迦久能尾奈良志・805 迦久斯母何母等・881 加久能未夜・886 迦久乃尾奈良志・892 可久婆可里・901 可久夜歎敢<以上、憶良>/815 可久斯許曾<大式紀卿>/819 加久之阿良婆<豊後守大伴大夫>/833 可久斯己曾<大令史野氏宿奈麻呂>

のように〈オ〉11回、〈他〉3回が見える。

第三に、甲類と乙類の混乱がないのが特徴である。その例は「イト乙ノ乙キ甲テ・イヨ乙ヨ乙・ウベ乙・コ乙コ乙ダ・コ乙ト乙コ乙ト乙・サキ甲ク・ト乙ノ乙シク・ト乙モ乙ニ・ハロ甲ハロ甲ニ・モ乙ト乙ナ」のように10語があり、12回の例が現れるが、「〈オ〉7回・6語、〈タ〉1回・1語、〈他〉4回・4語」の分布をなしている。前に触れたように〈オ〉と〈タ〉とが甲乙の区別を守っているし、〈他〉にも

831 宇倍母佐岐多流<壹岐守板氏安麻呂>・844 許々随母麻我不<小野氏国堅>・904 登母尒戯礼<作者未詳>・866 波漏々々尒<吉田宜>

のように混乱がないのである。特に「モ乙」の場合「814 等母尒比佐斯久<憶良>・904 登母尒戯礼<作者未詳>・802 母等奈可利提<憶良>」のように3例とも「モ乙」になっている。

6. おわりに

以上、万葉集巻5における語彙の中の「助詞・名詞・副詞」を対象にして、〈オ〉と〈タ〉と〈他〉、または〈オ〉と〈タ・他〉における語彙を品詞別に分析を行い、その語彙の延べ語数と異なり語数、またその割合、そして〈オ〉の語彙と〈タ〉や〈他〉の語彙における「共通語と相違語」「頻度の高い語」「甲類と乙類の混乱」などを中心にその語彙の特徴を明らかにした。その結果をまとめると次のようである。

1. 助詞は、延べ語数1015語(巻5で32.7%を占める)、異なり語数45語である。〈

10)2回の語は「イカニ・タダニ・ナ」がある。

オ>・<タ>・<他>の延べ語数の割合は、句数の割合とほぼ同じであり、異なり語数の割合は、<タ>が約2倍強、<他>が約1倍弱多い。<オ>と<タ・他>に共通している語彙は27語であり、相違している語彙は5語と13語である。特徴としては、<オ>の「ユ」に対して<タ>は「ヨ」を使っていること、歌の性格上<オ>に「カ」の使用が目立つこと、そして、「モ」の甲乙の混乱は、<他>にはあるものの、<タ>には1例もないことである。但し、<オ>に「モ」の混乱が見えるのは古写本があまりないことに起因する。ということは、<タ>に混乱がないことによっても<オ>の異例が説明ができるのである。

2. 名詞は、延べ語数766語(巻5で24.7%を占める)、異なり語数316語である。延べ語数の割合は、句数の割合に比して<オ>5.0減・<タ>2.2増・<他>2.8%増であり、異なり語数の割合は、<オ>の方が多様な名詞を使用している。共通語は61語で、その割合は19.3%であり、相違語は<オ>165語、<タ・他>88語である。特徴としては、歌の性格上、例の多い語彙の中「ヒト」一語に過ぎないことと「ウメ」と「ハナ(花)」の頻度が高いこと、甲乙の混乱があることである。特に、「コラ」に「許良」の「許」の表記があるのは、万葉集全巻と記紀歌謡においての「コ_甲」「コ_乙」「コ_甲ラ」の例によって乏しい古写本によることを説明した。

3. 副詞は、延べ語数71語(巻5で2.3%を占める)、異なり語数38語である。延べ語数の割合は、<オ>の方が11%も多く使っており、異なり語数にも、<オ>の方が語彙の多様性を見せている。共通語は6語で、相違語は<オ>22語、<タ・他>10語である。特徴としては、共通語は38語のうち15.8%の6語しかないことで、両方とも副詞を多様に使用していること、3回以上の使用語彙は「カク」一語しかないこと、そして甲乙の混乱がないことがあげられる。

今回は、紙面の都合上、今回取り扱うことのできなかった「助動詞・動詞・形容詞」を中心に巻5における語彙全般について検討をしていきたい。

表3 名詞

	語彙	<オ>	<タ>	<他>	計		語彙	<オ>	<タ>	<他>	計
1	アカゴマ	1			1	159	タナレ		1	1	2
2	アカホシ			1	1	160	タニ			1	1
3	アカモ	1			1	161	タニグク	1			1
4	アサツユ			1	1	162	タビ	1			1
5	アサブスマ	1			1	163	タマ	1			1

6	アサリ		1		1	164	タマデ	1			1
7	アシスリ			1	1	165	タマホコ	1			1
8	アシタ			1	1	166	タメ	2	1	1	4
9	アス	1			1	167	タモ _甲 ト乙			1	1
10	アソビ			1	1	167	タモ _乙 ト乙	1			1
11	アト	1			1	168	チチ	6		1	7
12	アヒダ	1		1	2	169	チトセ	1			1
13	アフチ	1			1	170	チヒロ	1			1
14	アマ	1	1	1	3	171	チヘ			1	1
15	アマクモ	1			1	172	ツカヒ			1	1
16	アマヂ	1		1	2	173	ツキ	4			4
17	アマヲトメ			1	1	174	ツチ	4		1	5
18	アメ(天)	6	1		7	175	ツツミ	1			1
19	アメ(雨)	2			2	176	ツマゴヒ		1		1
20	アユ	2		2	4	177	ツマヤ	1			1
21	アユコ			1	1	178	ツルギタチ	1			1
22	アラタヘ	1			1	179	テ	2		3	5
23	アヲヤギ			2	2	180	テブリ	1			1
24	アヲヤナギ			1	1	181	トキ	2	2		4
25	イキ	1			1	182	トキハ	1			1
26	イシ	2			2	183	トコ			1	1
27	イタト	1			1	184	トコヨ			1	1
28	イノチ	2		1	3	185	トシ	4		1	5
29	イハキ	2			2	186	トシノハ			1	1
30	イ化	1			1	187	トセ	1			1
31	イヘ	8	1		9	188	ドチ			1	1
32	イヘヂ			1	1	189	トホ	1			1
33	イマ	2	2	4	8	190	トミヒト	1			1
34	イメ		2	1	3	191	トリ	4			4
35	イモ _甲	4		2	6	192	ナ(名)	2	1	1	4
35	イモ _乙			1	1	193	ナ(魚)	1			1
36	イロ		1		1	194	ナカ	8	1	4	13
37	ウグヒス			7	7	195	ナガコヒ			1	1
38	ウケフツ	1			1	196	ナガテ	1		1	2
39	ウチ	2			2	197	ナナクサ			1	1
40	ウツツ		1		1	198	ナナセ			1	1
41	ウナカミ	1			1	199	ナハ	1			1
42	ウナハラ	2			2	200	ナミ			1	1
43	ウハニ	1			1	201	ナミタ	1			1
44	ウヘ	2		1	3	202	ナラヂ			1	1
45	ウマニ	1			1	203	ナリ	1			1
46	ウマヒト		1		1	204	ニ		1		1
47	ウメ	1	5	31	37	205	ニノホ	1			1

48	ウラ	1		1	2	206	ヌシ	1			1
49	ウリ	1			1	207	ヌノ	3			3
50	オキ	3			3	208	ネ	2			2
51	オキノ	1			1	209	ネヤド	1			1
52	オクラ	1			1	210	ノ			2	2
53	オト			2	2	211	ノチ	2		1	3
54	オホキミ	2			2	212	ハシ	1			1
55	オホクニミタマ	1			1	213	ハテ	1			1
56	オホミコト	2			2	214	ハナ(花)	3	6	27	36
57	オモテ	1			1	215	ハナ(鼻)	1			1
58	オヤ			1	1	216	ハハ	10		1	11
59	カカフ	1			1	217	ハマビ	1			1
60	カギリ	2			2	218	ハヤシ			1	1
61	カザシ			1	1	219	ハラ	1			1
62	カズ	1			1	220	ハル	2		12	14
63	カスミ			1	1	221	ハルヒ	1		1	2
64	カスユザケ	1			1	222	ヒ	4	1	1	6
65	カゼ	2			2	223	ヒゲ	1			1
66	カタ	3			3	224	ヒザ		1		1
67	カタキヌ	2			2	225	ヒタツチ	1			1
68	カタシホ	1			1	226	ヒツキ	1			1
69	カタチ	1		1	2	227	ヒト	14	4	5	23
70	カヅラ			3	3	228	ヒトクニ			1	1
71	カハ	1		3	4	229	ヒトナミ	1			1
72	カハカミ		1		1	230	ヒトモネ	1			1
73	カハド			1	1	231	ヒナ	1			1
74	カハナミ			1	1	232	ヒモ	1			1
75	カマド	1			1	233	ヒル	1			1
76	カミ(髪)	1			1	234	ヒレ	2	1	3	6
77	カミ(神)	5		3	8	235	フセ			1	1
78	カラクニ	1			1	236	フセイホ	1			1
79	カラシホ	1			1	237	フタ	1			1
80	カラタマ	1			1	238	フタリ	1			1
81	カリテ	1			1	239	フナノヘ	3			3
82	カレヒ	1			1	240	フネ	4			4
83	キ		1	1	2	241	ベ			1	1
84	キズ	1			1	242	へ(方)	1		1	2
85	キヌ	2			2	243	へ(上)		1	2	3
86	キハミ	2			2	244	ホケ	1			1
87	キミ	1	2	6	9	245	マ(馬)	1	1	1	3
88	キリ	2		1	3	246	マ(間)	1			1
89	クガネ	1			1	247	マクラ	1		1	2
90	クサ	1			1	248	マゲイホ	1			1

91	クシミタマ	2			2	249	マ斯拉ヲ	1			1
92	クスリ		2		2	250	マソカガミ			1	1
93	クニ	7	4		11	251	マタ	1	2		3
94	クヌチ	1			1	252	マタマ	1			1
95	クマミ	1			1	253	マタマデ	1			1
96	クモ	1	2		3	254	マツバラ	1			1
97	クリ	1			1	255	マナカヒ	1			1
98	クレナキ	3			3	256	マヒ			1	1
99	ケフ	3		4	7	257	マヘ	1			1
100	コ	4	1	3	8	258	マホラ	1			1
101	ココロ	7			7	259	マヨヒキ	1			1
102	コシ	2			2	260	ミ(身)	4	1	1	6
103	コシキ	1			1	261	ミカド	3			3
104	コダチ			1	1	262	ミコト	3			3
105	コト	5	2	4	11	263	ミタタシ	1			1
106	コトゴト	3			3	264	ミタマ	1			1
107	コトダマ	1			1	265	ミチ	4		2	6
108	コトドヒ			1	1	266	ミチユキ			1	1
109	コドモ	3	1		4	267	ミナ甲(蜷)	1			1
110	コトワリ	1			1	268	ミナ乙(皆)	2			2
111	コヌレ			1	1	269	ミナワ	1			1
112	コヒ			1	1	270	ミヤ	1			1
113	コ甲ラ			1	1	271	ミヤコ	4	2	2	8
113	コ乙ラ	1			1	272	ミル	1			1
114	コエ	1	1	1	3	273	ムツキ			1	1
115	サカヅキ			1	1	274	ムネ			1	1
116	サカヒ	1			1	275	メ	2		2	4
117	サカリ	2	3	3	8	276	メコ	3			3
118	サキ	1			1	277	メデ	1			1
119	サキクサ			1	1	278	モ甲(裳)			1	1
120	サクラバナ			1	1	278	モ乙(裳)	1			1
121	サケ		2		2	279	モ(喪・凶事)	1			1
122	サツユミ	1			1	280	モノ	6	1		7
123	サト			1	1	281	モモカ	1			1
124	サトヲサ	1			1	282	モモクサ	1			1
125	シタ	3			3	283	モモトリ			1	1
126	シタヘ			1	1	284	モモヘ	1			1
127	シヅ江			2	2	285	モロヒト			1	1
128	シツクラ	1			1	286	モロヒト			1	1
129	シツタマキ	1			1	287	モロモロ	1			1
130	シニ	1			1	288	ヤスイ	1			1
131	シバ	1			1	289	ヤド甲		1	2	3

132	シマ			1	1	290	ヤド乙	1			1
133	シモ	1			1	291	ヤナギ			2	2
134	シモト	1			1	292	ヤマ	2	1	3	6
135	シラクモ			1	1	293	ヤマヒ	1			1
136	シラタマ			1	1	294	ユキ	1	4	3	8
137	シロカネ	1			1	295	ユクヘ	1			1
138	シワ	1			1	296	ユフツツ			1	1
139	ス	1			1	297	ユフベ			1	1
140	スソ	1		1	2	298	ヨ(夜)	4			4
141	スベ	8		1	9	299	ヨ(代・世)	15	1	3	19
142	スミナハ	1			1	300	ヨイ			1	1
143	スメカミ	1			1	301	ヨコシマカ ゼ			1	1
144	セ	1		1	2	302	ヨシ		1		1
145	セコ			1	1	303	ヨチコ	1			1
146	ソコ	1			1	304	ヨド			1	1
147	ソデ	1			1	305	ヨル		1	1	2
148	ソノ		1	6	7	306	ヨロヅヨ	2		2	4
149	ソノフ			1	1	307	ワガヘ			2	2
150	ソラ	1			1	308	ワカユ	1		2	3
151	タカラ	1		1	2	309	ワギヘ			2	2
152	タクナハ	1			1	310	ワタ	4			4
153	タケ			2	2	311	ワラ	1			1
154	タスキ			1	1	312	エマヒ	1			1
155	タチバシリ	1			1	313	ヲ	1			1
156	タツ		1	1	2	314	ヲカヒ			1	1
157	タツカヅエ	1			1	315	ヲツツ	1			1
158	タドキ			1	1	316	ヲトメ	2		1	3
159	タナレ		1	1	2		小計	417	78	271	766

【参考文献】

- ・ 伊藤博(1996) 『万葉集積注』, 集英社.
- ・ 大野晋外(1965~1967) 『日本書紀上・下(日本古典文学大系)』, 岩波書店.
- ・ 沢瀉久孝(1990) 『万葉集注釈』, 中央公論社.
- ・ 河上志貴子(2005) 「『万葉集』巻五梅花歌三十二首の再検討(平成16年度京都大学国文学会研究発表要旨)」, 国語国文 74-2. pp.34-36
- ・ 蔵中進(1964) 「山上憶良の用語(その一)」, 神戸外大論叢 15-1. pp.95-107
- ・ 蔵中進(1965) 「山上憶良の用語-その"初語"について-」, 神戸外大論叢 15-6. pp.55-75
- ・ 倉野憲司外(1958) 『古事記・祝詞(日本古典文学大系)』, 岩波書店.
- ・ 小島憲之(1994~1996) 『万葉集(新編日本古典文学全集)』, 小学館.
- ・ 上代語辞典編修委員会(1994) 『時代別国語大辞典 上代編』, 三省堂.
- ・ 高木市之助・五味智英・大野晋校注(1957~1962) 『万葉集(日本古典文学大系)』, 岩波書店.
- ・ 土屋文明(1956) 『万葉集私注』, 筑摩書房.
- ・ 鶴久・森山隆(1995) 『万葉集』, おうふう.
- ・ 荻原浅男・鴻巣隼雄(1976) 『古事記・上代歌謡(日本古典文学全集)』, 小学館.
- ・ 原田貞義(1966) 「万葉集巻五の編纂事情--音仮名表記について」, 国語国文研究 35. pp.18-32
- ・ 藤井茂利(1976) 「万葉集の音仮名と朝鮮漢字音--巻五の仮名との関連に於いて」, 鹿児島大学法文学部紀要 文学科論集 第12号. pp.77-108
- ・ 古屋彰(1978) 「万葉集巻五の表記をめぐって」, 国語と国文学 55-3. pp.14-27
- ・ 山崎良幸(1955) 「「何せむに」について」, 『高知女子大学紀要』 2-2.
- ・ 山口佳紀外(1997) 『古事記(新編日本古典文学全集)』, 小学館.

要 旨

本稿は、万葉集巻5における語彙の中の「助詞・名詞・副詞」を対象にして、憶良(以下、〈オ〉)と旅人(以下、〈タ〉)やその他の作者(以下、〈他〉)における語彙分析とその特徴を明らかにしたもので、その結果を簡略に述べると次のようである。

1. 助詞は、延べ語数1015語(巻5で32.7%を占める)、異なり語数45語である。〈オ〉と〈タ・他〉の両方で用いられる語彙は27語であり、どちらか片方でのみ用いられる語彙はそれぞれ5語と13語である。特徴としては、〈オ〉の「ユ」に対して〈タ〉は「ヨ」を使っていること、〈オ〉に「カ」の使用が目立つこと、そして、「モ」の甲乙の混乱は、〈他〉にはあるものの、〈タ〉には1例もないことである。
2. 名詞は、延べ語数766語(巻5で24.7%を占める)、異なり語数316語である。共通語は61語で、その割合は19.3%であり、相違語は〈オ〉165語、〈タ・他〉88語である。特徴としては、歌の性格上、例の多い語彙の中「ヒト」一語に過ぎないことと「ウメ」と「ハナ(花)」の頻度が高いこと、甲乙の混乱があることである。特に、「許良」の「許」の表記は、乏しい古写本に起因するものである。
3. 副詞は、延べ語数71語(巻5で2.3%を占める)、異なり語数38語である。〈オ〉の方が語彙の多様性を見せている。共通語は6語で、相違語は〈オ〉22語、〈タ・他〉10語である。特徴としては、〈オ〉・〈タ・他〉ともに副詞を多様に使用していること、3回以上の使用語彙は「カク」一語しかないこと、そして甲乙の混乱がないことがあげられる。

キーワード：語彙(lexicon) 助詞(particle) 名詞(noun) 副詞(adverb)
 延べ語数(running words) 異なり語数(different words)
 共通点(common points) 相違点(different points)
 特徴(lexical features)

투 고 : 2012. 2. 29
 1차 심사 : 2012. 3. 17
 2차 심사 : 2012. 4. 7